

## 核兵器絶滅実現へのヒバクシャ使命

人類史上初の原爆投下国と被爆国の「和解」へのコンセンサスづくりにあり！

(初期2011.3.11. 第二次修正2012.11.8. 第三次修正2013. 8. 6. )

<http://www.a-bombsurvivor.com/PDF/abomb.documents/consensus.eng.pdf>

核兵器の恐ろしさを、当事者であるヒバクシャの口で心から絞り出すように訴えても、その核兵器の廃絶はおろか、削減努力の半歩すら実現していません。2009年8月10日のおプラハ演説でその「絶滅」を訴えたオバマ米大統領をして「私が生きている間には無理だろう・・・」とさえ言わしめたのが現実です。なお、最近に至り同統領は「安全で効果的な核抑止力を(米国は)持続する」とも言明。他国の核の脅威が存在する限り、米国自らが率先して核廃絶することはない、という従来の主張を繰り返しています。

なぜ核抑止力のメカニズムが働かないのでしょうか？ヒバクシャの一人としての立場から、国際的政治問題には疎いことを承知の上、いままでどのヒバクシャも語らなかった内容を大胆に発言して世界の人たちに訴えてみたいと思います。ちなみに、私は満78歳を期して此処フィリピンに居を移し、65年間の沈黙を破り、原爆生存者証言活動を、しかも、かつて誰も語らなかった「視点」による執筆活動を自作のウェブサイトを通して展開しています。すでに英文1万字に及ぶ証言論文をウェブサイトとその日本語訳とともに開示しています。

単純な考え方もかもしれませんが、どうやら、原爆の恐ろしさは感覚の上では理解していても、まさか自分の身に降りかかることはないだろうといった心理があることは否定できません。核戦争が勃発した場合、核武装力で優位に立っていれば自分の国だけは生き残れる、という考えが背景にある感じです。少なくとも相応の「報復核攻撃力」を維持していれば、抑止力にもなり、生き残りの余地があると考えての核兵器増強姿勢が窺えます。もっとも、瀬戸際の交渉力を維持するためには、自分の破滅になることを承知の上で、捨て身の交渉力維持に資するための核武装エスカレートが背景にあるとも考えられます。

大胆かつ、想像するだけでゾッとすることですが、核兵器に対する恐ろしさを人類全体が真に自覚し、一致してその廃絶に腰を上げる、上げざるを得なくなる時、それはこの地球上で、ある2つの国が戦闘状態に至って核兵器使用に踏み切った時だと思います。しかも、瞬時にして複数の報復核兵器使用がなされ、加えて、単なる2国間の争いでなく、友好同盟関係にある諸国を巻き込んだ形の核戦争拡大を誘発してしまうという恐るべき状態です。その結果がどんなものになるかは万人の予想に難くないでしょう。

聖書が語る「終末」とは、意外案外と人類自身の手で招来する感じがしてなりません。それは神が罪深い人類に与える罰かもしれません。不幸なことですが、人類は彼我ともに甚大な被害をしかも、治癒不能かつ、子々孫々に核汚染が浸透して手の施しようが無くなるまで追い込まれて初めて目覚める動物だと思わざるを得ません。核兵器による核武装は自分こそが万一の時に勝者として生き残れる、というとんでもない独りよがりの妄想を抱いてのこのような気がしてなりません。

彼我ともに大量死を誘発し、かつその恐ろしい核被害が子々孫々に及ぶに至ってこそ、始めて人類が目覚めるのが核の脅威と考えます。そこで初めて人類共通の問題として否応なしに核絶滅問題に真剣に取り組まざるを得ない立場に追い込まれるとさえ断言して憚りません。ここまで追い込まれないと人類は核の脅威に目覚めないと残念ながら思わずにはおれません。

ではそうなる前に、そのような破滅的な事態を防ぐために、誰が、どの国が説得力と明確な論

理を元にしたコンセンサスづくりを可能として人類に発信し得るかが問題です。その当該国とはほかならぬ、人類初の原爆投下国アメリカ(人)と、人類初の原爆被爆国日本(人)の両者にこそ、その全人類のかつ道義的責任があると強く主張します。その両者が68年間もの長期間にわたり、正式な話し合いの場をもつことなく現在に至ってことに問題があると考えます。

人類史上初の核爆発による加害国・被害国の体験をした当事者こそが、世界人類の誰よりも先駆けて共同の情報発信を世界に発し得るものであり、そのことこそが唯一の説得力とコンセンサスづくりになり得ると考えます。具体的には、当事者双方が以下のような思想を共有することにあると考えます。

被爆68周年を迎える日米関係は、「原爆投下国と被爆国」という関係において、他のどの国よりも真剣に話し合い、加害被害者の枠を超えた視点で、その悲劇の再来に歯止めをかけるイニシアティブを取るべきだと思えます。核恐怖から人類を解放する意味において両者が共有すべき人類的な使命であり、道義的な責任であると考えます。この両者を除いては誰も説得力を行使できないとさえ考えます。

結論を先に述べます。両者(国)は原爆投下(被爆)65周年を機に、原爆投下とその被害に至った経緯を双方が反省して、政治的、人類学的、道義的意味における「和解」に到達する努力が肝要と考えます。その「和解の精神」をもって世界に発信してこそ、原爆恐怖の原点当事者としての説得力足り得ると確信します。

「和解の精神」に関して言うならば、先のおバマ米大統領が2012年11月のAPEC会議出席に先立って訪日された折にNHKインタビューで発言された言葉が注目に値します。「今回はスケジュールが一杯で被爆市訪問はできないが、私の任期中に何時か訪問する栄に浴したい」という趣旨の発言がそれでした。

この大統領発言に対して、当時のヒロシマ・ナガサキ両市長(秋葉前広島市長・富上前長崎市長)が共同声明で発言された言葉があります。「ヒバクシャが抱いてきた和解の精神をもって…」といった言葉でした。これは全く事実無根のものでして、大統領に対するゴマすりの発言だとこき下ろすることを辞しません。その虚構のものとは一線を画すものであることを強調します。その事実無根の「和解の精神」の存在を否定したうえで、前にすすみます。

原爆投下国とその被害国の間における歴史的な公の論議は現在に至って皆無です。「歴史検証」といえば、例えば日中関係のそれがあります。日中有識者による歴史共同研究の報告書が2012年1月31日に公表されたことを受け、中国メディアは、「日本側が(日中戦争を)『侵略戦争』と位置づけ、南京大虐殺が集団虐殺事件であることを認めた」といった日中間の一致点を評価して伝えました。

一方、現地紙は「研究開始時、日本の学者は『社会の圧力』を理由に『侵略』の2文字さえ書き入れたがらなかった」、「侵略戦争の言葉が入ったのは最終段階だった。日本側は侵略を否定しないが、文章で書くのは避けようとした」等々、そこに至る背景を報じています。

南京大虐殺についても、北京青年報は「中日間の敏感な歴史問題について報告は回避しなかった」とし、「双方が大規模な虐殺行為があったことを確認した」と成果を強調。犠牲者数をめぐり、中国側の報告書にある東京裁判判決の「20万人以上」と南京戦犯裁判判決の「30万人以上」を挙げたが、日本側が2万～20万人と諸説あると説明したことには触れなかった。中国の有識者の話として、「(日本人が)中国人に損害を与えたとの記述は比較的軽いものとなった

が、これらは長期の議論が必要だ」と伝えた、等々があります。原爆投下以前の問題として今日にして、ようやく日の目をみるに至ったことに、原爆問題を置き換えて考えてみる必要があると思います。

私の存念は、原爆投下国対被爆国(日米)との間における一連の歴史検証が行われてしかるべきとすることです。政治家でもなく、ヒバクシャ団体に属する者でもない平凡なヒバクシャの一人ですが、原爆で九死に一生を得た生存者であり、愛すべき肉親を原爆投下国に対する恨みの中で失命したヒバクシャ家族の資格と責任を意識して、あえて単独でその両国間当事者としての「話し合い」の場を求めべく提言するものです。

当該両国間における「和解」が急務と考えます。それなくして真の核廃絶コンセンサスは得られないとすら考えます。生存ヒバクシャ平均年齢が79歳に達している事実をもって痛切に感じます。

「和解とは相手が死ぬるまでにすることにある」とある作家は書いていますが、20万人にも及ぶ被爆死者に数十万人に及ぶ生存者の実態を考えると、それは余りにも酷であると考えます。まして、核絶滅が国際的課題になっている現代にあつて、前述したとおり、そのイニシアティブを取り得るものは人類歴史初体験をした原爆投下国(民)であり、被爆国(民)である日米両国を除いて他にはないと考えます。

真の意味の「和解」とは、決して一方的に「許す、許してあげる」といったものではありません。加害者・被害者双方が争いの原点に立ち返って、双方が紛争の元になった相手の立場を理解し合い、互譲の精神で語り合い、かつ、場合によっては双方が互いに犯した人類的罪を「認め合う」ことによって到達し得るものと考えます。

さて、そうなると、一度は大喧嘩して双方に甚大な人命損傷を招来した事件に関する和解だけに、厄介です。最重要問題はどちらが「口火」を切るか、です。強者(原爆投下・戦勝国の米国)側からの「和解申入」では、一方的な詫び状の提出にほかなりません。それを期待することは不可であり、当事者の米国の国民感情が許さないでしょう。

とすれば、唯一の「和解申入」は弱者である被害者側からの一歩も二歩も譲った姿勢で口火を切ることが不可欠と考えます。とりわけ、生存者の平均年齢が79歳で、数にして25万人という状態です。私を含む生存ヒバクシャが音頭をとって、和解への名乗りをあげずして誰が適任か、ということになります。

政治的問題がからむからムリだと言う観方もあるでしょうが、余命幾ばくもないヒバクシャの立場を考え、かつ20万に犠牲者の御霊に対する最後の供養としての和解が求められると思うのです。現存するヒバクシャが主張すれば、誰も止められないと確信するするのですが、どうでしょう？

とすれば、次に問題となるのが、何をもって和解への口火を切り、どのような姿勢で呼びかけていくかが問題です。私は次のように考え、提唱します。原爆投下に起因する彼我双方のわだかまりに関して言えば、次の二つの点に対する双方の認識が和解への手がかりになるでしょう。

その1つは、開戦そのものに至る歴史認識への相互理解や許し合い精神の培養です。真珠湾の奇襲攻撃の是非論もその一つでしょう。そこに至る対日原油禁輸制裁か、その前の日本の対ソ戦略が招来した米側の危機感か等々への歴史認識の検証の場も必要でしょう。

その2つは、ヒバクシャ側から積極的発言として、次の「3つの視点」から、被爆国としての反省を込めた心で和解を問いかけるということです。

#### **第1の視点は;**

ヒロシマ・ナガサキの両市民は「軍都」として繁栄した歴史を持つ。ゆえに、両市民は戦時中に武器弾薬を製造したり、軍人を海外に派遣する拠点にしたりしたことで、市民も戦争に直接間接の関与をしたという事実を立ち止まって考える。この事実を考えたら、戦争そのものの罪、とりわけどんな種類の武器を使うかどうかといったことに対しては謙虚になることが求められる。こうした歴史的な事実を考えたら、「自己の犯した罪に対する償い」として被爆を受けとめる立場に置かれた、と解釈することをもって和解への提唱とする。

#### **第2の視点は;**

歴史的事実として、戦時中に日本は原爆開発の研究をしいた。万一、米国に先んじてその開発に成功していたら、日本のほうが先にそれを使用していただろうという過去仮定法的事実がある。原爆が非人道的かどうかの別なく、日本はその開発を推進していたことはレッキとした事実である以上、われわれも悪魔の心を持っていたに等しいと考えるべきだ。とすれば、日本も原爆製造を研究していたという歴史的事実の問題に関して議論することは避けられないと考えるべきだ。一方的に原爆投下を悪と位置付けるには矛盾があるのではないか？

#### **第3の視点は;**

原爆犠牲者として受け入れるべき事実は、原爆投下が終戦をもたらし、かつそれにより日米双方の尊い多くの人命が救われたという事実を受け入れる必要がある。被爆者が理解すべきことは、こうした原爆に対する解釈の仕方を理解することが重要であり、かつそうした考え方に耐える努力が必要だ。とすれば、亡くなった犠牲者はそうした原爆投下が多くの人命を逆に救ったという、いわば、十字架上のイエスキリストのような「人類の身代りの」存在となったと考えられる。そのように解釈をすれば、憎しみを抱いて無残な死を遂げた犠牲者の魂は救われなかったネギヤティヴな姿勢は出てこないはずだ。もし、このような解釈が関係者筋に理解され、そうした考えが世界に発信されたら、「そうだ、原爆死没者が生贄になってくれたからこそ、われわれは生かされているのだ」といった事実が目覚めるだろう。このような解釈をもってすれば、われわれ生かされている者こそが世界平和や世界各国のためになる役割をはたす立場にあると考えることができる。

日米戦争を反省して考えられることに、双方の主張があります。私は、此処フィリピンの地でVOAテレビ放送をしばしば観ます。たしか、「Pearl Harbor Survivors(パールハーバー生存者)」と題する放映でした。主役の真珠湾奇襲攻撃で生き延びた元軍人や、ヒロシマとナガサキに原爆投下した元軍人のインタビューに興味をもって、観入りました。

真珠湾生存者の元軍人さんの言葉が強烈でした。「もし、日本が真珠湾攻撃を誤るなら、われわれアメリカは原爆投下を誤る」と明言されたことでした。一元軍人の弁として軽視できない発言です。私が主張したいことは、では、どちらが先にその言葉を切り出すか、です。

重ねてのことですが、以上、「3つの視点」をもって、ヒバクシャと被爆国が持ち出すべきことだ、というのが私の主張です。その具体的な手法は、先のヒバクシャと被爆国が持ち出すべきことだ、というのが私の主張です。その具体的な手法は先の「日中有識者による歴史共同研究会」みたいなことも考えられるでしょう。

このような思いきった提唱をする私ですが、それに共通する精神を当事者国である米国大統領であるオバマさんが、いみじくも「9. 11テロ8周年にペンタゴンで遺族を前に語った言葉を再現してアピールとします。VOA インタネット紙のみに見出した同大統領の言葉です。

"Let us renew the true spirit of that day. Not the human capacity for evil but the human capacity for good-not the desire to destroy but the impulse to save and to serve and to build,"

(あの日の真実の心を新たにしましょう。悪に対する人類の能力としてでなく、善に対する人類の能力としてですー破壊することへの欲望でなく、守り、奉仕し、建設するための推進力として、です)

この大統領の言葉こそ、9. 11 テロの被害国の大統領をして恨みを超えた「人類的言葉」でなくてなんでしょう。原爆投下国の大統領がテロで犠牲者となった遺族を前に語った言葉としては、なんとも崇高であり、その精神こそが、ヒバクシャの弁でなくて何であるか、と主張してやみません。そのような人格の大統領宛に表現こそ異なれ、恨みや被害者意識を超越し、人類全体が抱く罪意識を反省しながら「お互いに許し合いませんか、でも決して忘れることなく…」といった心境で同大統領にアピールしていくことの大きな意義があると確信します。

なお、本書末尾にオバマ米大統領に対する願望を披歴します。大統領閣下は前述したように、「任期中の何時か被爆市を訪問する栄に浴したい…」とNHK記者インタビューでご発言になりました。第一期中のことでしたが、幸いにして再選第二期を迎えられました。願わくば、同大統領閣下の「お約束事」でもあることに鑑み、かねてよりヨシダがウェブサイトでも公開しているごとく、その大統領閣下の被爆市訪問は同大統領の最期の任期年でもある「2015年被爆70周年記念日」という、まことに「ひと区切りの良い年次」に的を当てていただければ幸いと存じます。

5周年、10周年、15周年…と「区切り良い年次」はロータリーやライオンズクラブの周年行事にも使われる習慣がございます。まして、オバマ大統領最終ご任期直前の「被爆市訪問」となれば、歴代の米大統領で初めてということにもなり、彼我の国民感情からしても、「和解し合う」に最もふさわしい年次と心得ます。本書をお目通しの方々も、どうかそういった考えのもと、機会あるごとに、その実現への助言提言をお願いしてやみません。

2010年3月21日(初期)

2012年11月7日

(オバマ米大統領再選を機に時差等、ごく一部修正)

2013年8月6日

(被爆68周年ヒロシマ原爆祈念日に際して第三次修正)

吉田祐起

原爆生存証言者・健康生きがいづくりアドバイザー：在フィリピン・ラグーナ州

[yoshida@a-bombsurvivor.com](mailto:yoshida@a-bombsurvivor.com)